

- (37) 以下の三本の表記は次の通り。雲紙本・関戸本、「まち出鶴鮑」。卷子本、「待出鶴かな」。
- (38) ③④⑤⑧⑩のうち、⑧は出典未詳（三木雅博氏は⑧について、粘葉本類の本文「白」の方が「原詩の本文であったことは確かであろう」とされた（前掲書（注26）P178）。その他については粘葉本類と出典とは相違していた（③『詞花集』巻九、『麗花集』巻下、「なりぬへきかな」。④『本朝文粹』巻十二、「必」。⑤『白氏文集』巻十、「青」。⑩『本朝文粹』巻九、「帳」）。
- (39) 前掲「B・C」中にもそれぞれ雲紙本類との同文箇所は存するが僅少であった。
- (40) いわゆる、伊予切「第一種」（1〜235）を指す。

## 第五節 伊予切の性格 — 粘葉本との関係を中心に —

一

平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本について、堀部正二氏は主に本文の近似関係から「(1)・(2)・(3)」に分類された。<sup>①</sup>一方、久曾神昇氏は、主に形態的な面から「甲類・乙類」に大別された。<sup>②</sup>

堀部氏「(1)・久曾神氏「乙類」には粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切、堀部氏「(2)」・久曾神氏「甲類」には雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本が挙げられ、その点において両氏の所論は一致している。

本節では、そのうちの伊予切の性格、及び諸伝本間における伊予切の位置について、主に、粘葉本との関係を中心に考察を行った結果について述べる。

その経緯、目的は次の通りである。

従来、『和漢朗詠集』諸伝本のうち、文学研究上、最善本とされているのは粘葉本である。しかし、その本文は独特であり、また、そこには誤写と思しき箇所も存する。

かつて、山田孝雄氏は、粘葉本を「最も信憑するに足るもの」とされ、「これを訂するが為に用ゐるものは所謂伊豫切と称せらるるもの」と述べられた。<sup>③</sup>しかし、その根拠については詳述されていない。また、ここでは伊予切巻下については触れられていない。

一方、『新編国歌大観』における『和漢朗詠集』の底本には粘葉本が採用されている。解題では「最善本と目されているが、誤字や脱字も存するので、他の諸本および出典によって改めた」<sup>④</sup>とされる。しかし、そこにおける基準についてそれ以上の記述はなく、「諸本」名も挙げられていない。また、その翻字内容には同書の「凡例」<sup>⑤</sup>で示された事項と齟齬するかと思しき点がある。

同書では、粘葉本における「偶然的な脱落・衍字・誤写」<sup>(6)</sup>とも断じ得ないものにも校訂・補訂が施されているため、粘葉本の原姿が掴めない。それらの個々の当該箇所について検討を加える試みは基礎研究として重要な課題といえる。その際、本文・書風等において粘葉本に「極めて相近い」<sup>(7)</sup>とされる伊予切・近衛本・法輪寺切との校合は不可欠であろう。

しかしながら、先学の研究では、それら四本の関係、及び諸伝本間における位置について不明瞭な点が存し、また、伊予切に関する調査の範囲も全容には及んでいないようである。<sup>(8)</sup>

『日本名跡叢刊』では、伊予切「第三種」については田中親美氏の「透き写し」に因るものが掲載され、「上下巻の復元」がなされた。「透き写し」とはいえ、同書により伊予切の本文の全容が明らかとなった。

本節では伊予切に関する調査は同書に拠るものとし、本文については本書（前節）中、言及し得なかつた部分を主に取り上げ、その補完を試みる。

## 二

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首に上る。そのうち、いずれかの伝本に存しない詩歌句は次の九八首である（断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する）。

17	・	42	・	82	・	90	・	91	・	92	の次	99	・	107	・	109	・	115	・	120	・	178	・	194	・	215	・	225	・	237	・	246	・	249	・	257	・	268	・	271	・	313	・	321	・	322	・	323	の次	330	・
337	・	344	の次	347	・	348	・	348	・	354	・	363	・	369	・	376	の次	380	・	380	・	407	・	422	の次	434	・	434	の次	449	・	459	・	468	・	472	・	476	・	482	・	489	・	507	・	518	・	534	・		
535	・	542	・	547	・	549	・	551	・	556	・	561	・	564	・	584	・	596	・	598	・	601	・	603	・	615	・	617	・	618	・	621	・	629	・	636	・	652	の次	657	・	663	・	677	・	678	・	684	・	699	・
701	・	703	・	712	・	714	・	729	・	735	の次	736	の次	738	・	739	・	740	・	741	・	742	・	743	・	744	・	745	・	756	・	757	・	760	・	784	・	785	・	796	の次	797	・	803	の次	804	・				

右のうち、脱落または追補である可能性の高い、いずれかの伝本一本のみが他本と異なる場合を除く（有る場合も無い場合

も独自事象は除く」と次のごとく二六首となる。詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」「無」として示し、諸伝本の略号を括弧内に挙げる。

- ① 17 有 (伊・粘・雲・関・久・唐 2・山・葦)  
 無 (卷・戊)
- ② 42 有 (伊・粘・卷・久・下・山・多・戊・葦)  
 無 (雲・関)
- ③ 215 有 (伊・粘・久・山・多・戊)  
 無 (雲・関・卷・葦)
- ④ 268 有 (伊・粘・久・卷・山・戊)  
 無 (雲・関・葦)
- ⑤ 313 有 (伊・粘・雲・久・山・戊・葦)  
 無 (関・卷・和 1)
- ⑥ 321 有 (伊・粘・行大・久・卷・唐 2・山・多・戊・葦)  
 無 (雲・関)
- ⑦ 322 有 (行大・雲・関・久・卷・和 1・山・多・戊・葦)  
 無 (伊・粘)
- ⑧ 354 有 (伊・粘・久・戊・山)  
 無 (雲・関・卷・葦)
- ⑨ 380 有 (伊・粘・久・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

⑩ 407 有(伊・粘・雲・関・法・久・益・山・戊・葦)

無(卷・太)

⑪ 422 の次 有(益・山)

無(伊・粘・雲・関・久・卷・下・戊・葦)

⑫ 433 の次 有(伊・太・大内・山)<sup>⑩</sup>

無(粘・雲・関・久・卷・戊・葦)<sup>①</sup>

⑬ 434 有(粘・雲・関・久・卷・山・戊・葦)

無(伊・太・大内)

⑭ 449 有(伊・粘・近・久・卷・太・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

⑮ 534 有(伊・粘・近・久・卷・太・下・山)

無(雲・関・戊・葦)

⑯ 535 有(伊・粘・近・法・関・久・太・下・山・戊・葦)

無(雲・卷)

⑰ 564 有(伊・粘・近・久・卷・山・多・戊・葦)

無(雲・関)

⑱ 603 有(伊・粘・近・久・大内・山)

無(雲・関・卷・戊・葦)

①9 617 有(伊・粘・法・雲・関・久・唐1・下・山・戊・葦)

無(安・卷)

②0 621 有(伊・粘・雲・関・久・山・戊・葦)

無(安・卷)

②1 652 の次有(安・卷・定大)

無(伊・粘・近・雲・関・久・益・山・戊・葦)

②2 712 有(伊・粘・近・久・安・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

②3 714 有(伊・粘・近・久・安・卷・山・戊・葦)

無(雲・関)

②4 729 有(伊・粘・近・久・安・卷・太・山・戊・葦)

無(雲・関)

②5 784 有(伊・粘・近・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

無(雲・関)

②6 797 有(伊・粘・近・久・益・山)

無(雲・関・安・卷・太・戊・葦)

伊予切・粘葉本はそれぞれ八〇二首を有し、その詩歌句数は平安時代書写とされる諸伝本のうち、最も多い。右に掲げた二六首のうち、伊予切・粘葉本の両本に無いのは⑦の通り、わずか一首(322)であり、それは両本にしか見られない。また、二本間における同事象数について、その一致率は諸伝本のうち、伊予切と粘葉本とが最も高い。

一方、両本間に見られる相違は四首であるが、そのうちの二首は前掲⑫・⑬であり、その他については、次の通り、伊予切・粘葉本それぞれの独自事象である。次に挙げる601は粘葉本が有し、「796の次」は伊予切が有する。

■ 601 こくらくはゝるけきほとゝきゝしかとつとめていたるところなりけり

有 (粘)・雲・関・近・久・卷・山・戊・葦

無 (伊)

■ 796 の次よのなかはゆめかうつゝかうつゝともゆめともしらすありてなければ

有 (伊)・雲・関・近・法・久・安・卷・太・益・山・戊・葦

無 (粘)

久曾神氏は、右掲601・「796の次」、及び、322 (前掲⑦)のうち、無いのはいずれも両本それぞれの「誤脱」とされた。さらに、322 (前掲⑦)については、「八百首のうちで僅かに一首または二首の誤脱であることを思うに、両本がたまたま一致するといふことは考えにくく」、「原本には存しながら、粘葉本、伊予切の祖本において、すでに脱していたと、しばらく推定しておく」と述べられた。<sup>12)</sup>

それに対して、野沢千佳子氏は別の見解を示された。<sup>13)</sup>

関戸本には321・797の二首が無く (前掲⑥・⑳)、粘葉本には322 (前掲⑦)・「796の次」の二首が無い。野沢氏は321と322、及び、「796の次」と797とがそれぞれ隣接している点に注目され、その二か所について、『和漢朗詠集』の編集過程におけるゆれをそのまま反映している」と推測され、『和漢朗詠集』の成立にかかわるもの」と述べられた。その「編集」の主体は明記されていないが、野沢氏が指摘されたのは書写者ではなく、撰者のことであろう。「796の次」については、粘葉本と同類とされる伊予切・近衛本には存していることから粘葉本の脱漏であるとも考えられる。しかし、野沢氏はその点については触れられなかった。

また、雲紙本・関戸本の両本に無いのは一八首（前掲②・③・④・⑥・⑧・⑨・⑪・⑫・⑭・⑮・⑰・⑱・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖）であるのに対して、伊予切・粘葉本の両本に揃って存しない詩句が322のわずか一首（前掲⑦）であることを考え合わせるると、その推論には無理があるように思われる。

その傍証となり得ると思しき事例には、以下述べる通り、321（詩句）の下方に小書きされている作者名のことも挙げられる。伊予切・粘葉本における321の下方には「萱」と注されている。321は『田氏家集』に所収されている作品であり、「萱」とあるべきは（321ではなく）その次に位置する322である。両詩句（321・322）には、同一文字（碧・「書」・「青」・「紙」）が用いられており、内容的にも同題のものが感じられる。書写者に因る目移りが関係し、321の詩句が書された後、その下方に、誤って322の作者名「萱」が注された（322の詩句は書き落とされた）可能性がある。

伊予切・粘葉本のそれぞれに無い場合は322（前掲⑦）を含めて二首のみであり、「後人の加筆」とされる詩歌句を除くと、他の諸伝本に比して両本の脱している詩歌句数は少ない。両本が有する詩歌句数の多さから、久曾神氏が述べられたごとく、322は両本にはなかったものの、「原本には存し」ていたということも十分考えられる。

次に、伊予切と粘葉本との間に見られる相違のうち、両本それぞれの独自事象を除いた二首（前掲⑫・⑬）について述べる。「433の次」（前掲⑬）は先学により「恐らく公任原撰本には存しなかったもの」であり、「後人の加筆にして、しかも尊圓親王以後のしわざなるべきなり」とされた和歌である。山城切を除くと、434（前掲⑫）を有する伝本には「433の次」（前掲⑬）がなく、434（前掲⑫）が無い伝本は「433の次」（前掲⑬）を有する。山城切がその二首を有しているという点については山城切の「後世の特徴」と考え得る。しかし、伊予切「第一種」は書の研究者の間で十一世紀中葉の書と推定されている。山田孝雄氏の所説を前提とすると、もとはそれと一連であったはずの伊予切「第三種」の中に「433の次」が存するという点は不可解なことと言わざるを得ない。

伊予切との関係において、一致率が高いのは近衛本も挙げられる。



前掲①～②のうち、近衛本の現存箇所(⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖)の全て(二一首)において近衛本は伊予切と(粘葉本とも)一致していた。

近衛本については零本二巻・断簡四葉、合計三四一首を調査し得たが、対照し得る五五首のうち、伊予切との相違は四首のみであった。うち、一首は伊予切の独自事象(前掲601)であり、残りの三首については本書(前節)中、既述した通り、近衛本の脱漏であると思われる。

以下、排列について述べる。

平安時代の書写とされる諸伝本間にみられる排列の異同箇所は三三か所である。前項と同様に、「他本が同排列であるのに対して一本のみが他本の排列と異なる場合」を除外すると次の通りである。その詩歌番号を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

① 110・111 (伊・粘・雲・関・久・卷・山・戊)

111・110 (唐2・葦)

② 133～143 [卷上・春部「藤」・「躑躅」・「款冬」] (伊・粘)

137～143・133～136 [卷上・春部「躑躅」・「款冬」・「藤」] (雲・関・卷・山・戊・葦)

③ 201・202 (伊・粘・久・卷・山・戊・葦)

202・201 (雲・関)

④ 272・273 (伊・粘・多)

273・272 (雲・関・久・卷・唐2・山・戊・葦)

⑤ 308・309 (伊・粘)

309・308 (雲・関・久・山・戊・葦)

308 無・309 (卷)

⑥ 312・313 (伊・粘・久・山・戊)

313・312 (雲・葦)

312・313 無 (関・卷・和<sup>1</sup>)

右に掲げた事例の全てにおいて伊予切は粘葉本と同様であるが、それらのうち、②では、卷上・春部(卷末)の三詩歌群が、諸伝本では「躑躅」・「款冬」・「藤」の順<sup>(18)</sup>であるのに対して、伊予切・粘葉本では「藤」・「躑躅」・「款冬」であり、また、⑤についても伊予切・粘葉本の二本のみに存する事象である。なお、伊予切・粘葉本と雲紙本・関戸本とが①を除く五項目において相違していることも確認された。

前項(「詩歌句の有無」)の場合と同様に排列についても伊予切と粘葉本との一致率はいずれの二本間における数値よりも高い。この両本が相違するのはわずか二か所のみであり、その排列は次の通り、伊予切・粘葉本それぞれの独自事象であった。異同箇所を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

■ 196・195 (伊)

195・196 (粘・雲・関・久・卷・下・山・多・戊・葦)

■ 367・368 (粘)

368・367 (伊・雲・関・久・卷・山・戊・葦)

同類とされる近衛本・法輪寺切についても、対照箇所数は少ないものの、その全て(近衛本は一九か所、法輪寺切は一箇所)において伊予切・粘葉本と同排列であった。

以上、詩歌句の有無については、伊予切と粘葉本とが相違するのは四首のみであり、そのうちの二首は両本それぞれの独自事象であることが確認された。

排列についても両本の相違箇所（わずか二か所のみ）は両本それぞれの独自事象であった。

形態的な面について考察した結果、伊予切と粘葉本とは諸伝本中、最も近い関係にあり、近衛本についても、諸伝本の独自事象（近衛本の独自事象も含む）を除くと伊予切・粘葉本との相違箇所は見当たらず、この三本は同類であり、かつ、雲紙本・関戸本とは別の類であることが改めて確認された。

また、二本間における同事象数について、諸伝本のうち、伊予切と粘葉本とが最も高い一致率であるという点に加え、この両本のみ見られる事象が三か所もあるという事実（A・322が無いということ、排列の面において、B・巻上・春部（巻末）の三詩歌群が「藤」・「躑躅」・「款冬」の順であること、C・308・309の順であること）も注目された。

一方、伊予切には434が無く、その位置に「433の次」が存していた。前述した書写年代のことに加え、両本の関係が極めて近い（有無における両本間に見られる違いはそれぞれの独自事象を除くとその箇所のみである）という事実を照らし、伊予切が「433の次」を有している点は前述した通り、不可解に思われる。山田孝雄氏の説が確かであるならば、伊予切「第三種」の書写年代は十一世紀中葉では符号しない。それより下るといった事情（たとえば、「後世の書きたし」に因る等）があったということではなからうか。しかし、伊予切の書には既述した通り諸説あり、また、その他にも解明し得ないことが疑問点として残されている。<sup>(19)</sup>

### 三

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表に拠ると、伊予切と諸伝本との関係は、同文率の高い順に、和歌では、粘葉本（九四・〇%）、法輪寺切（九一・七%）、近衛本（八九・五%）、漢詩では、法輪寺切（九八・〇%）、粘葉本（九六・一%）、近衛本（九三・二%）が挙げられる。

ここから概ね伊予切は粘葉本・法輪寺切・近衛本と近い関係にあることが知られる。また、対照箇所数の少ない法輪寺切を除くと、伊予切と粘葉本との一致率が最も高く、両本は諸伝本中、最も近い関係にあることが看取される。

諸伝本間において異同がある際、他本に対して伊予切・粘葉本・法輪寺切・近衛本が同文を有し、かつ、それらの間に異同がないケースは次のごとく分類される（近衛本・法輪寺切の散逸等の部分も調査の対象とした）。

1. 伊予切・粘葉本・近衛本・法輪寺切の四本のみが同文であるケース

2. 伊予切・粘葉本・近衛本の三本のみが同文であるケース

3. 伊予切・粘葉本の二本のみが同文であるケース（近衛本・法輪寺切、散逸等の部分に限る）

右掲1・2については本書（前節）中、既述した。他文献に見当たらない本文を、その一類は共有していたが、その際、調査の対象を近衛本の現存箇所に限定したため、右掲3については取り上げなかった。よって、以下、その事例を全て挙げる。

紙幅の都合上、当該箇所のみを載せるが、まず、伊予切・粘葉本の本文を載せ、次に異同を載せ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

① 36はるたゝは（伊・粘）

あすからは（雲・関・久・卷・山・戌・葦）

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71	74.8	74	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94.0	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75	66.7	60	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84	85.6	81.9	84.7	85.9	74	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

② 56 けふとのみ(伊・粘)

けふのみと(雲・関・久・卷・大内・山・多・戊・葦)

③ 58 をしくもあるかな(伊・粘)

をしきはるかな(雲・関・久・卷・山・多・戊・葦)

④ 79 ちやちちにけり(伊・粘)

たなひきにけり(雲・関・久・卷・大内・山・葦)

⑤ 80 晴(伊・粘)

暗(雲・関・久・卷・大内・山・葦)

⑥ 97 芳(伊・粘)

芬(雲・関・久・唐<sup>2</sup>・卷・山・多・戊・葦)

⑦ 98 計(伊・粘)

辨(雲・関・久・卷・山・多・戊・葦)

⑧ 121 織(伊・粘)

識(雲・関・久・卷・山・戊・葦)

⑨ 142 いまやちるらん(伊・粘)

いまやさくらむ(雲・関・卷<sup>20</sup>・益・山・戊・葦・伊和)

⑩ 166 かよふなれ(伊・粘)

かよふらし(雲・関・久・行金・卷・益・山・多・戊・葦)

⑪ 175 漠(伊・粘)

寔(雲・関・久・卷・山・戌・葦)

⑫ 190 くさふかく(伊・粘)

くさふかき(雲・関・久・卷・大内・山・戌・葦)

⑬ 202 くもはれて(伊・粘)

きりはれて(雲・関・久・卷・山・戌・葦)

⑭ 207 あきのはしめに(伊・粘)

あきのはしめを(雲・関・久・卷・多・山・戌・葦)

あきのはしめと(下)

⑮ 207 なりぬとおもへは(伊・粘)

けふそとおもへは(雲・関・卷・山・葦)

今日とおもへは(久・戌・多)

けふ<sup>ソト</sup>をおもへは(下)

⑯ 213 更(伊・粘)

夜(雲・関・久・卷・山・多・戌・葦)

⑰ 214 鬢(伊・粘)

髻(雲・関・久・卷・山・多・戌・葦)

⑱ 327 中(伊・粘)

裏(雲・関・久・卷・山・戌・葦)

⑲ 341 緩(伊・粘)

暖<sup>晩</sup>(雲)<sup>21</sup>

暖(関・久・卷・葦)

暗(山・行金)

晩(下・戊)

⑳ 381めつらしとみる(伊・粘)

めつらしくみる(雲・関・久・卷・戊・葦)

めつらしくみゆる(山)

㉑ 785任(伊・粘)

枉(雲・関・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

右のうち、⑭・⑮・⑲・⑳を除く一八か所において、伊予切・粘葉本に対する諸伝本の本文が同文であることが知られた。また、一四か所(②・④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・㉑)において、他の文献に伊予切・粘葉本の本文が見当たらない。そこには誤写と思しき本文も含まれるものの、前節中、指摘した通り<sup>㉒</sup>(前掲1・2の場合同様)、特有の本文を両本は共有しているといえる<sup>㉓</sup>。

一方、近衛本・法輪寺切の散逸等の部分も含め、その一類の間に異同がある場合については、以下の「A.」～「F.」に分けられる。

- A. その一類のうち、近衛本のみが異文である。
- B. その一類のうち、粘葉本のみが異文である(近衛本の散逸等の部分は除外)。
- C. その一類のうち、伊予切のみが異文である(近衛本の散逸等の部分は除外)。
- D. 近衛本・粘葉本と伊予切・法輪寺切との間に異同がある。



E. その一類のうち、法輪寺切のみが異文である。

F. 近衛本・法輪寺切の散逸等の部分において、伊予切と粘葉本との間に異同がある(右掲「B.」・「C.」のケースは除外)。

前項同様、近衛本の現存箇所(右掲「A.」・「E.」)について、その概要は既に前節中、指摘した通りである。<sup>24</sup>よって、今回は、右掲「F.」に関する考察を行った結果について述べる。「F.」における当該箇所では、①伊予切・粘葉本のうちのいずれか一方が諸伝本中、独自の本文を有する(伊予切一〇か所、粘葉本七か所)、②両本それぞれが同一箇所において諸伝本中、独自の本文を有する(伊予切二か所、粘葉本二か所)、③その他(伊予切一二か所、粘葉本一二か所)に分類される。

まず、①・②の実態を調査した結果について述べる。伊予切では当該本文の殆どが、また、粘葉本ではその半数程において、ア、「両本間において、漢字一文字中、ある一部分が共通していたり、文字が崩された結果、その字形が類似していたりする」<sup>25</sup>、イ、「衍字を有している」、ウ、「脱字かと思しい」事例のいずれかによって占められていた。そこに該当しないのは、伊予切では三か所(111「いりにけるかな」・153「おもはさるらん」・316「にしきなりける」)、粘葉本では五か所(70「宿」・204「悴」・93「ねこしにうゑし」・111「なりにけるかな」・293「あさきりの」)が挙げられるが、それらのうち、誤写とも言い難いのは111「いりにけるかな」・「なりにけるかな」、293「あさきりの」の三か所のみかと思われる。

前掲①・②では、どちらかといえば伊予切の方に杜撰な印象を受ける。が、③その他(伊予切一二か所、粘葉本一二か所)に拠るとそのようでもないことが判る。

以下、その事例を挙げる。当該本文を有する伝本が多数派である場合は「諸伝本」とし、その他の伝本名は略称で示す。

まず、漢詩については、128「關」(伊予切・諸伝本)・「闌」(粘葉本・久松切<sup>29</sup>)、159「消」(伊予切・諸伝本)・「銷」(粘葉本・諸伝本)、210「晚」(伊予切・戊辰切)・「暁」(粘葉本・諸伝本)、233「睡」(伊予切・諸伝本)・「眠」(粘葉本・久松切)、308「秋」(伊予切・諸伝本)・「愁」(粘葉本・関戸本)、310「鵠」(伊予切・諸伝本)・「胡」(粘葉本・葦手本)、417「孤」(伊予切・諸伝本)・

「胡」(粘葉本・諸伝本)、530「風」(伊予切・諸伝本)・「聲」(粘葉本・太田切・久松切)、785「娘」(伊予切・関戸本)<sup>(30)</sup>・「郎」(粘葉本・諸伝本)等が挙げられる。

それらのうち、210については句意から「晩」とあるべきで、粘葉本の誤写かと思われる。また、233の当該箇所についても柿村重松氏は粘葉本「眠」は改められるべきと指摘され、伊予切「睡」を採られた。<sup>(32)</sup> 308についても『日本古典文学大系』<sup>(33)</sup>・『新潮日本古典集成』<sup>(34)</sup>等では伊予切「秋」が採られており、310も伊予切「鵠」が通用するものである。また、417について、伊予切「孤」であるべきであり、530においても伊予切「風」が「原作通り」とみてよさそうである。<sup>(35)</sup>

また、それらの両本の事例を比較すると、その多くが前項中、指摘した「ア」、『両本間において、漢字一文字中、ある一部分が共通していたり、文字が崩された結果、その字形が類似していたりする』<sup>(36)</sup>ことも確認された。

次に、③その他(伊予切一二か所、粘葉本一二か所)のうちの和歌については、三か所(25「けふはくらしつ」(伊予切・諸伝本)・「けふもくらしつ」(粘葉本・戊辰切)・今日をくらしつ(唐紙切?・葦手本)、132「このころはかり」(伊予切・諸伝本)・「このはるはかり」(粘葉本・戊辰切)・「このはるはかり」(下絵切)、143「やへやまふきの」(伊予切・益田本)・「やへ山吹は」(粘葉本・諸伝本)が挙げられる。

以上、伊予切は、粘葉本・近衛本・法輪寺切と多くの同文箇所を有しており、とりわけ、粘葉本との間には両本特有の本文も認められ、両本の関係は近いことが確認された。両本間における異同箇所のうち、両本のうちのいずれか一方が少数派か、もしくは諸伝本中、独自かという事例がその殆どであった。また、その異同箇所には(漢字の)字形の類似が目立っており、その多くは誤写に因ると推測される。

## 四

形態・本文の両面から考察を行った結果、伊予切と粘葉本・近衛本・法輪寺切とは確かに同類であり、また、諸伝本中、

伊予切と粘葉本にのみ認められる特異性も看取され、両本は極めて近い関係にあるということが改めて明らかとなった。

一方、両本間には異同も認められた。個々の本文における異同箇所の中には字形の類似が異同の要因として挙げられるものが少なからず見受けられた。

以上の考察結果を基に推し量ると、そこには書写者に因る字形の誤認の結果生じた誤写が混在していることが考えられる。

伊予切・粘葉本の書写者、もしくははいずれか一方の伝本の書写者が字形の一つ一つに対して細心の注意を払ったという事実については既に拙稿<sup>(38)</sup>において述べた通りである。両本が生成されたその書写の過程において、実際、「誤認」がそれ程なされていたのであれば、そのことと書写者が字形の一つ一つに対して細心の注意を払ったという事実とは矛盾するのではないか。また、その場合、「同一人物が同一の和漢朗詠集を数多く書いた」という安東聖空氏の所論<sup>(39)</sup>では整合しない点があると考えられる。それらの誤写の多くは、詩歌句の内容、及び正確な字形・崩し方等について、書写者の理解が不十分であったことに起因すると思われるが、既に述べた拙稿<sup>(40)</sup>における考察結果を踏まえると、両本は別人に因る書写と解する方が自然ではなからうか。本書(第二章第二・三節)における推論と矛盾のない結論に至った。

伊予切と粘葉本とが別人の手になる場合の方が、両本にのみみられる特異な事象について、一過性の誤写等ではなく、親本、もしくは祖本においても同様であったという可能性が高いと考えられる。本文研究上、ここでは両本が同筆である場合より別人の手になる場合の方が伊予切の資料としての有効性が高まるという見方も可能であろう。

以上の推論が正しければ、伊予切と粘葉本とが同文である場合はそれが両本本来の姿とみてよいのではなからうか。よって校合がより精確に行われることにより、その類推のための手掛かりが得られると推察される。『新編国歌大観』における粘葉本の翻字内容はそれに基づき検討されるべきではなからうか。

ただし、いわゆる伊予切「第三種」については「後世の書き足し」である可能性がある。また、既述した通り、伊予切の書

には複雑な事情があり、未だ解明されていない点が残されている。本文研究上、その前提に立ち、適宜、判断せざるを得ない。

注

- (1) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P. 312
- (2) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕P. 189
- (3) 山田孝雄氏校訂『岩波文庫676倭漢朗詠集』〔昭和14年 岩波書店〕P. 13
- (4) 『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2〔平成15年 角川書店〕
- (5) 前掲(注4)に同。
- (6) 前掲(注4)に同。
- (7) 前掲(注1)に同。P. 312
- (8) 前掲(注1)に同(P. 19・20)。前掲(注2)に同(P. 190)。
- (9) 記述中「の次」とは、『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次(ここでは796の次)に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。
- (10) 「433の次」を伊予切中の和歌で示せば「よにふれはことのはしけきくれたけのうきふしことにくひすそなく」である。本歌は山城切では「434の次」に位置する。
- (11) 久松切では行間に別人の手(片仮名)により補筆されている。
- (12) 前掲(注2)に同。P. 190
- (13) 野沢千佳子氏『和漢朗詠集』の和歌本文について(片桐洋一氏編『王朝の文学とその系譜』〔平成3年 和泉書院〕所収)
- (14) 前掲(注3)に同。P. 14・15

- (15) 前掲(注1)に同。P 316
- (16) 前掲(注3)に同。P 15
- (17) 本書(第三章第六節)中、指摘した。
- (18) ただし、両本ともに「目錄」(巻上・下の冒頭「首題」)の次にそれぞれ位置する「題」の一覧では「躑躅」・「藤」・「款冬」の順である。
- (19) 田中親美氏は543の前部は伊予切「第二種」、後部は「第三種」であると判断された。しかし、その論拠は見当たらない(田中氏の分類の通り、543の後部、及び544が「第三種」に属するならば、同一詩句(543)の前部と後部の書写者が異なるということになる)。
- (20) 卷子本、「今歟作嵐」。
- (21) 傍書「晚」は「鎌倉時代の筆と思しい」(前掲(注1)に同。P 21)。
- (22) 拙稿「近衛本の性格―粘葉本・伊予切との関係を中心に―」(本書第二章第四節)所収
- (23) 伊予切には傍書がいくつか存する。既述した通り、本文と同筆か否かという点について不明のため、傍書を有する本文は調査の対象外としたが、89「村」<sup>封</sup>・120「着」<sup>者</sup>・288「鳳」<sup>漢イ</sup>・317「秋」<sup>春イ</sup>等の伊予切の本文(傍書を除く)は諸伝本中、粘葉本とのみ同文である。
- (24) 前掲(注22)に同。
- (25) 伊予切 80「乗」・103「池」・188「銷」・282「挿」・292「後」・399「暮」、粘葉本 249「今」・399「墓」。
- (26) 伊予切 165「くさむから」、粘葉本 278「おくもものは」。
- (27) 伊予切 417「師」ナシ・654「之」ナシ、粘葉本 307「園」ナシ。
- (28) 当該箇所について出典・他の文献では以下の通りである。70『菅家文章』「果」、204『白氏文集』「衰」、93『万葉集』「いこしてうゑし」、93『拾遺集』・『拾遺抄』「ねこしてうゑし」。
- (29) 久松切、「闌」<sup>闌</sup>。
- (30) 当該箇所につき、雲紙本では削消されているため不明。削消された上から別人の手により「娘」と補訂されている。

- (31) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系』73〔昭和40年 岩波書店〕P 100
- (32) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』〔昭和48年 藝林舎〕巻上 P 200
- (33) 前掲〔注31〕に同。P 125
- (34) 大曾根章介・堀内秀晃両氏校注『新潮日本古典集成』61〔平成5年 新潮社〕P 118
- (35) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』〔平成7年 勉誠社〕P 179・柳瀬喜代志氏『和漢朗詠集異文考』（和漢比較文学会編『和漢比較文学叢書』第四巻〔平成5年 汲古書院〕所収）
- (36) 210「晚」と「暁」とは行草体が類似しており、また、417・530を除くその他（128・159・233・308・310・785等）においても当該文字（漢字）中の一部分が両本では共通する。
- (37) 本稿中、指摘した通り、諸伝本中、伊予切・粘葉本の両本にのみ確認された事象には、形態面においては、A・322が無いということ、B・巻上・春「卷末の三詩歌群が「藤」・「躑躅」・「款冬」の順であること、C・308・309の順である等の三点がある。また、個々の本文については、他の文献には見当たらない伊予切・粘葉本の本文のうち、④・⑨・⑩・⑬は解釈に深く関わる。前者の形態面に関する三か所、及び後者の個々の本文に関する四か所について、後代の『和漢朗詠集』書写本を調査したところ、伊予切・粘葉本と同要素を有するのは一本（一か所）のみであった（一本のみが「C・308・309の順」であった。なお、鈴木健一氏『和漢朗詠集』版本考）〔汲古〕第12号〔昭和62年12月〕では諸版本の形態面に関する調査結果が示されている。そこでも前述した形態面「A」・「B」・「C」について、伊予切・粘葉本と同要素を有する事例は見当たらない。
- (38) 本書（第二章第二節）中、指摘した通り、両本間の書・用字には共通性が見出され、書写上の型・書写者が規範とした字形）が存していたかと推察される（仮に、両本が別人の手になる場合は、書写者自身により規範とした字形を写し取っているかの）ごく感ぜられる箇所も存していた。
- (39) 安東聖空氏著『かな古筆美の研究・御物粘葉本和漢朗詠篇』〔昭和60年 同朋舎〕P 14・18

(40) 拙稿「伊予切の書―粘葉本との関係―(二)」・「伊予切の書―粘葉本との関係―(二二)」(本書(第二章第二・三節)所収)

【追記】

前掲(注37)における後代の諸伝本に関する項目は、平成十年度、国文学研究資料館においてリサーチアシスタントとして調査させて頂いたデータに基づき、近年、再調査を行ったものである。当時、貴重な機会を頂きましたことに末文乍ら改めて御礼申し上げます。